

## 【第4回】 3・11大災害「福島」を肌で感じるツアー

### ミニシンポジウム 報告

開催日：2016年3月12日（土）16:35～

会場：ロイヤルホテル丸屋

参加者：15名（講師を含む）

司会：伊藤たてお（日本難病・疾病団体協議会 理事会参与）

挨拶：森 幸子（日本難病・疾病団体協議会 代表理事）

自己紹介：全員

#### 【講演1】 南相馬市におけるコミュニティ創出のための復興支援活動

##### 福島県立医科大学災害医療支援講座

南相馬市立総合病院神経内科 小鷹 昌明先生

皆さま初めまして、この町で医師として仕事をしながら復興支援活動のお手伝いをさせていただいている小鷹昌明と申します。いま、皆さまのご紹介をお聴きして驚きました。自分のお体のことだけで精一杯だと思うのですが、こうして福島で被災地を見ていただき、何か感じたこと、思うことがあるのではないかと、最初から感銘しております。



私の話がどこまで皆さまのお役に立てるかわかりませんが、私は栃木県の大学病院を4年前にやめまして、平成24年4月にこの町に移住してまいりました。なぜ大学病院をやめてここに来たかという話をすると、それだけで30分以上経ってしまうので、そこは置いておき、きょうはこの町に来て私が医師として感じたこと、実際に活動をしてきたことなどをお話させていただきます。皆さまの、ちょっとした勇気につながればいいなと思っております。

まずはこのタイトルにありますように、医者としての仕事の話をして、お医者さんだからあたり前だということになると思いますので、医者としての話はいちばん最後に少しご紹介させていただきます。それよりも被災地で何をしなければいけなかったのかということとをまずお話させていただきます。医療とは関係ありませんが、こういう変わったお医者さんがいるのかなとお感じいただければありがたいと思います。

自己紹介ですが、私は埼玉県で生まれました。神経内科医なので、多発性硬化症、成人ステル病などが専門領域かもしれません。

きょうの皆さまの行程表を見ますと、小高区それから浪江町の吉沢牧場を見学なさって

いるのですね。南相馬市というところは、地震と津波と原発災害というように世界初のトリプル災害に見舞われたエリアです。

いま私たちがいる場所は、だいたい福島第1原発から25kmぐらいです。小高区は20km圏内で、元警戒区域です。東京から福島第1原発までは、200km以上離れております。いま、震災のときのお話をあれこれしても実りあるものにはなりませんので、そこからどうなったかという話をさせていただきます。

ご想像できると思いますけども、南相馬市は震災で人口の流出が起きました。震災当時の人口分布と平成26年で比べると、若い世代の人がどんどん出てしまい高齢者世帯の割合が高くなりました。

もともと南相馬市は、65歳以上の高齢化率は25%だったのですが、震災後は一気に33%まで上がり、3人に1人が65歳以上の超高齢化社会になってしまいました。そういう意味では、日本の20年後を一気に先取りしてしまったエリアになります。東京都でも20年後には、こういう人口分布になると試算されております。

地図を見ますと、福島第1原発は大熊町、双葉町にまたがっています。南相馬市は、その北側に位置するのですが、南相馬市というのはもともと3つの町が平成7年の市町村合併で合併した町です。

もともとは鹿島町、原町、小高町の3つが合併して一つの市になったのですね。市町村合併は、いろいろとすったもんだするものですが、やっと一つの町として再スタートして仲良く暮らしているところに震災が起ってしまった。こともあろうか小高区は20km圏内、原町は20kmから30km、そして鹿島区は30kmから外になり、それにより警戒区域だとか避難解除準備区域だとか何でもないエリアだとかに分かれ、今までやっと一つにまとまってきたところに再び分断が起きました。それが何よりも南相馬市の最大の不運だと考えられます。

多くは語りませんが、小高区の住民がここには住めないということで、ほとんど鹿島区に避難したのですね。そうすると鹿島区の人と小高区の人が入り混じって生活しますが、小高区の人ほとんど保証が受けられお金が入ってきます。鹿島区の人家は家が流されてもあまり保証がなかったり、そういうごたごたがいっぱいあります。

それでも5年が経ち、なんとか少しずつ治まってきてはおりますが。私は震災後、1年してからこの町に来ましたが、まだまだ混乱の渦中にありました。

私がこの町に赴任して、医者として医療支援をスタートして気づいたことは、家が流されて仮設住宅で避難を余儀なくされている人、うつになったりアルコールに走ってしまう人など、要するに孤立する人が増えてしまったということです。

先日(3/1)の福島の新聞にはまだ「仮設孤独死県内で66人 毎年増加、目届きにくく」といった記事が載ります。岩手県、宮城県、福島県の被災3県の中で、断トツに福島県は孤独死というか孤独自殺をする方が多いです。しかも、まだ増えているといのが現実です。特に男性に多いです。壁に「原発さえなければ」「仕事をする気力を失いました」といったなぐり書きをして自殺された方もいます。

私はこの町に赴任してきたときに、こうしたことが起こるだろうと予見しておりました。なぜならば、阪神・淡路大震災のときに、4年間で6000人（震災死・震災関連死）ぐらい亡くなられたということですが、孤独死されたのが244人というデータが残っています。

その中で病気などがなかったかという点、中高年男性で、多くが無職でアルコール依存や慢性疾患を抱えている方が震災後に孤独死、孤独自殺するリスクファクターであることがわかっていました。だから、当然東日本大震災でも、孤独死が起こりうるということが容易に想像できたわけです。

私も、そうした孤独死を少しでも減らしたいと思ったものですから、仮設住宅なんかに行って、仲良くするというか、特別なことをするわけではないのですが、お話をしたりみんなでゲームをしたりといったサロン活動をしていました。

このサロンに集まった人は、写真を見ても一目瞭然なのですが、ほとんどが女性ですね。やっぱり女性は逆境に対して強いです。男性はだらしのないなあみみたいなところがありまして、これが孤独死する方が男性に多いことと関連しているのではないかと思ったわけです。

それで、仮設住宅などで孤立しているような男性に何か趣味を持っていただけないか、引っ張り出して一緒に何かできないかと、病院のスタッフみんなと相談しました。

そして、コミュニティの創出活動をしたいということでチームホープ（HOHP（H：引きこもり O：お父さん H：引き寄せ P：活動））というのを立ち上げました。希望のホープにかけて、有志団体というかボランティアでチームを作り、お父さんたちに何をすれば興味をもってもらえるかを考え、いろいろな議論になりました。

何をやったかという点、木工教室を始めました。2013年1月で、震災から2年経つかどうかです。私に何か木工を教えるスキルがあるかといえば、ありません。いろいろ考えて、協力を仰いだのは南相馬市にある建築組合です。全建総連とありますが、代表の方と会い、孤立防止の木工教室で教えてくれる職人さんはいませんかと相談したら、うちの会全員で教えますと即決をいただきました。そして、毎週日曜日の午前にスタートしました。いろいろご縁に恵まれました。アトリエや道具はどうするかといったこともありましたが、いろいろご寄付をいただいたりして、とにかく始めることができました。

ただ、木工教室をひらくというわけではなく、そこには仕掛けを考えました。まず、何を作るかという点、公共施設に置けるようなものとか、やはり町の復興のお役に立てるような木工製品にしました。各自がばらばらで趣味の範囲でプラモデルを作るようにするのではなくて、みんなで一つのを仕上げるのがいいのではないかと考えました。あと、お子さんのためになるようなものとか、公園のベンチ、区役所のカフェの陳列棚、学校の図書館に本棚を寄贈したり、町のプランターを作ったり、企業の看板を作ったりしてきました。

地元では少し評判になりまして、福島民報に「力を合わせて木工制作」というように載りました。それから朝日新聞、日本経済新聞、読売新聞と載り、市から感謝状もいただき、一応世間からも評価をいただけたのかなと感じています。

もう一つのプロジェクトのお話をします。木工で気をよくしまして、次に何をやろうかと

考えました。小高区は、震災から1年が経ち警戒区域を解かれたので入ってみたとき、駅前の「菓誌工房わたなべ」に「必ず小高で復活します」という看板が立っていました。たぶん店の主人は、これを書いて避難したのでしょう。私はこれを見て、強烈なインパクトが脳裏に焼き付きました。この「菓誌工房わたなべ」さんのために何かをしたいとかってに思いまして、小高区で料理教室をやろうと思いました。小高区は、当時まだ水も出ないのですが、第1回を2013年9月11日に開催しました。

「菓誌工房わたなべ」さんは、いまは原町区に店を移転させて継続されています。けっこう盛況ですね。

水が出ないので、タンクで汲んでこないといけないことを想定して、できるだけ水を使わない料理ということでギョーザを作りました。このときも、私に料理を教えるスキルがあるわけではありません。また、考えました。

病院というところには、栄養士さんとか、料理が得意な人がけっこういるのですね。栄養士さんに、手伝っていただけませんかと言ったら、即「いいよ」と言ってくれました。原ノ町の人、みんな気がいいというか優しいというか協力してくれるのですね。

小高区役所にいついつやりますと言いました。水は出ないので汲んでいきますが、トイレは使えません。区役所は水が出るので、トイレは区役所を貸してくださいという話を進めました。

そうしたら、5日前に区役所から電話が掛かってきて、このときだけ水を出すようにしますと言ってきて、会場で水が使えるようになりました。やればできるということですね。

行政に対しては、無言のプレッシャーがいいですね。机をたたいて「どうしてくれるんですか」というのはあまりよろしくないです。「わかりました。でも私たちはやりますから」と声を荒げずに実行することで、行政というのは動いてくれるのかなと勉強になりました。

小高区からは、避難してきたいろんな飲食店があります。そのマスターに一軒、一軒電話をして、小高区で料理教室をするので講師をしていただけませんかとお願ひして、2か月に1回ぐらい展開しています。

純粋にごはんを作って食べて、楽しいですよ。南相馬市だけでなく、岩手や宮城でも料理教室を仮設でやっておられることが多いので、別に特別なことはありません。復興支援としては、定番といえば定番です。ただ、我々は旧警戒区域で、もともとそこで飲食店を営んできたご主人やおかみさんに来ていただいて、昔の味をみんなで楽しめるという仕掛けを考えました。

小高区出身で西 芳照さんという有名なシェフがおられます。サッカー日本代表の専属シェフなのです。サムライブルーの料理人という本もあります。こんな有名な方が小高区におられるのだと思いお願いしたら、このときはなんと60人ぐらいの参加がありました。もう会場に入りきれないぐらいです。小高区のポテンシャルもすごいなと感じました。

男とは？それはシャイでプライドの生き物であるということで、イベントをやるときは男性5人に対して女性1人ぐらいがちょうどいいです。女性5人、男性5人を集めて何かをやろうとしますと、たいがい女性の方が強い。男は萎縮してしまいます。だからサロン

活動などのイベントをやる場合には、男性5人に対して女性1が1人いれば盛り上がりません。

男性と何かをやろうとした場合、男はなかなかシャイなので、役割を与えないと活動できないことがあります。あとは「〇〇さん、頼りにしてますよ」とか自尊心をくすぐることが大事です。例えば、木工教室で「〇〇さん、ちょっとこの材木を切ってください」なんて言うと「そうか」みたいな感じでやってくれたりします。

そして、作ったものがちゃんと公共施設に置かれて人の役に立っていることです。「あれはおれが作ったんだぜ」みたいなことで木工の技術がどんどんスキルアップしていきます。そういったことで、男性も活動的になっていくのではないかとということを学びました。

これまで、コミュニティ創出活動の話をしてきました。最後に診療の話をしてします。私は神経内科医で、まさにここでの役割として難病患者さんをどうするかということに直面しています。

ALS患者さんは、この町には5人います。そのうち3人ぐらいを診ています。人工呼吸器を付けている人が1人います。そういう人に対してどうしようかということで、大学病院ではけっしてやることはなかった在宅診療をやることにしました。ほとんどの南相馬市の総合病院は、震災後には在宅診療科があります。だから在宅をやる仲間がいました。だから私もずっと入り込めたのですが、その在宅診療科の先生と一緒に神経内科に関して在宅診療をしています。

ただ、往診車がなかったのです。先生たちは、みんな自分の車で往診に行くわけです。そうすると、事故を起こしたとき保険はどうするかという話になってしまうので、公用車が欲しいということになりました。

日産自動車に手紙を書きまして、車をくださいませんかとお願ひしました。そうしたら、くれはしませんが、貸してあげると言われまして、日産リーフという電気自動車を持ってきてくれました。

贈呈式がありまして、お偉いさんが来てでっかいカギを渡されたりして、ステッカーまで作ってくれました。これを今でも往診車として使っています。最初は1年ぐらいリースという感じでした。それだけでもありがたかったのですが、1年経ったら、もうめんどくさいからあげますと言われてもらってしまいました。

仮設住宅は密集してお住まいになられますので、インフルエンザとかが蔓延したらどうしようもないと思ひまして、インフルエンザの予防注射をボランティアで打ちに行く活動を始めました。これは毎年やっていて、今年もやりました。

やっと難病の話ですが、難病患者さんをどうやってケアをしていけばいいか悩みます。とりあえず、難病患者さんがどういう生活をしているのかというリサーチが必要です。患者会が2つあります。全国パーキンソン病友の会と認知症の人と家族の会です。残念ながらこの2つぐらいしかありません。一応、私も入会させていただいて、一緒に難病対策についての

ような事業にも参画させていただいています。

つきつめると、全国どこでもそうだと思うのですが、介護士が足りないです。これは被災地にとっては、いかんともしがたい状況にあります。なぜならば、子育て世代のお母さんたちが避難していますから、介護士とかケアマネジャーさん、看護師がごっそり抜けてしまい、どうしようもないあり様です。

これはもう町で介護士を作りましょう、育てるしかないということで、そういった講座で講師をさせていただきました。あと、シルバー人材の復活です。リタイヤしても、元気なお父さんお母さんはいっぱいいますから、隠居する前に少し町のために働きませんかということをしていければいいなと思っています。

その他、いろいろです。私の活動範囲としては、ラジオのパーソナリティといいますが、コミュニティFMというミニ放送局ですが、ここで医療の実態についてなどのお話をしています。

この町は、最近けっこう治安が悪いです。いろんな作業の人が入ってきてというと語弊がありますが、ありがたいことにいろんな人が復興のお手伝いに来ていただいて、ちょっとガラの悪い人もいたりして飲み屋さんで小競り合いのようなこともあります。

それでパトロールランニングをやりましょうということで、そういったチームを作りました。あとは、ものを書いたりするのが趣味なので、エッセイを出したりといったことをやりました。

南相馬市といえば『相馬の馬追』をご存じですか。初めて聞いたという人は、きょうは憶えてください。これは町の一大イベントです。7月にあります。馬に乗った武者が町を練り歩いたり、競馬をやったり侍のかっこうをしていろんなイベントをします。

私は馬に乗った経験はまったくといってありませんが、初めて馬追を見たときに、なるほどかっこいい、これはぜひ出るべしと思いました。とりあえず乗馬を習えるところを紹介していただき、冬の寒い雪の中、雨の時も練習をこなして出ました。2014年と2015年の2回、鎧を着て武者のかっこうをして馬に乗り町を歩きました。

平将門の時代に、将門が野生の馬を放ち、それを敵と見立てた軍事訓練をしたというのが最初の言い伝えです。しかし、それは大うそで、実際は400年ぐらいの歴史しかありませんが、その方がロマンがあるといことになっています。

私もこの町でいろんな支援だけをしているのではなくて、自分でも楽しめることをしています。生きがいといってもいいかもしれません。今年も、馬追に出る準備をしていますから、楽しく南相馬で暮らしています。

まだまだ被災地で苦しんでいる方はいます。でも、たいへんだ、原発事故はまだ終わっていないのだと声高に言っても、けっこう都内の人は冷めています。あまりにも風化しています。だから辛いことだけを言ってもあまり共感を得られないというか、そういう時期は終わ

り、いまはけっこう充実して過ごし、楽しい町になってきているのですよということを、私はもう少しアピールしていきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

質問1：木工教室や料理教室は、男性だけを対象にしているのでしょうか。

回答：実際には女性の参加者も多いです。ただ、アピールするときに「男性の」と付けないと男は来ないかなと思いました。最初から男女だれでもいいですよとすると、特に料理教室は圧倒的に女性が多くなります。だから「男の料理教室」という名前にして、女性も歓迎というようにしました。

質問2：なぜ、この地に来ようと思いましたか。

回答：大学では準教授という立場でしたが、この先にながめるかなと思っていました。教授になるのは興味がありませんでした。だんだん管理的な立場になってきて、患者さんとは離れて病院の運営に携わるようになりました。それはそれで価値のあることですが、私にはどうなのかと、現場との隔たりを感じていました。そろそろ大学をやめようかなと思ったときに震災がありました。私は埼玉なのですが、埼玉に戻る前に福島かなと思い、一度見学に行ったらやはり医師が足りなくて、1年か2年ぐらいと思ったのですが、気が付けば4年いて、まだ帰る気はないです。

## 【講演2】 鈴木 明美氏（宮城県の多発性硬化症患者）

鈴木と申します、よろしくお願ひします。15分という時間で何を話そうかと小鷹先生のお話を聴きながら考えました。今まで4年間経験してきたことは尽きないのですが、きょうは仮設住宅にいたときのこと、そしていまは復興住宅にいますが、現在の状況をお話したいと思います。



まず、仮設住宅に入ったのは震災の年の10月で一番最後でした。これでもうおしまいというときに、障害者枠でも入れないし高齢者枠でも入れないし、私たちはどこに入れるのだろうと思っていたときに、キャンセルがあり入らないかと言われたところが石巻の仮設で一番いい場所でした。病院は近いし、銀行は近いし買い物も便利だということでした。それで、そこに行ったのはいいのですが、仮設により建てる会社が違うので他のところはどうか知りませんが、私のところはものすごく段差が多い住宅でした。

その段差を乗り越えるのに、這って歩いたりと本当にたいへんでした。あるとき、支援団体の方から、国からの通達で仮設住宅に入って不具合があった場合には公費で直していいというお知らせがあったと教えていただきました。その方が通達をコピーをしてくれて「鈴木さん、何年住むかわからないので、何かあったときにこれを出して自分の住みやすいよう

に直してもらった方がいいよ」という話をされました。

しかし、役所に直してほしいと言ってもぜんぜん相手にしてくれなくて、あげくの果てには障害者手帳をお持ちですかと言われました。持っていますよと言うと、窓口の方がコピーをさせてくださいというので「何か必要なことがありますか」と言うので、障害を持っている人は障害福祉果で手続きをしてくれと言うのです。けど、実費だと思いますよと。「石巻ではみなさん実費でやっています」と言われました。

そのときに、支援団体からもらった用紙を出して、実はこういうのが国から来ているのですけどご存じないですかと言ったら、窓口の人がびっくりしました。みんなで回し読みしているの、初めて見たようです。石巻では混乱していたのもあったのですが、それくらい上からの通達が末端に届いていないことが多々ありました。

それで、交渉をして12月にやっとオクケーが出て、取りかかったのが翌年の1月でした。あらゆる所に段差があったので、その段差を解消するのと手すりとお風呂。お風呂は、お湯と水の蛇口が別々だったのですが、少し感覚障害があるので、やけどしたら困ると思って混合弁に直してもらおうとしました。そしたら、ダメと言われましたが、本当はそれもオクケーだったのですね。

それをやってもらったときに、石巻市では公費で付けたのは初めてだったらしくて、とても貴重だということで市役所や地域のケアマネージャーらが写真を撮りにきました。何事だろうと思いましたが、それくらい石巻は混乱していて、すったもんだの末、一応住みやすい仮設になりました。

仮設住宅に行ってから、だれも知り合いがいません。調子がいいときは、いまみたいに話をしたり歩いたりできますが、調子の悪いときはほとんど起きられない日があったり、記憶がはっきりしなくて思ったことをうまく話せなかったりと、いろいろと症状が出てきます。だれかサポートをしてくれる人が欲しかったのですが、周りは知らない人ばかりで、自分一人では外に出られないなという気持ちでいました。

とにかく自分のことをわかってもらわないと仮設では住めないと思いました。それから2年くらい、自分の病気のことを調子のいいときに言ってしまうと「この前はあんなに元気だったじゃない」と言われるので、午前中に調子が良くて午後から悪くなる時にイベントに行ったら、行くときは元気で帰りはもう歩けなくなっているの、その状態をだんだんとみんながわかってくれるようになりました。

最初は、あの人なんだか変だなという感じで、その内に病気を理解してくれる人が何人か出てくるようになりました。私より先に「明美ちゃん具合が悪そうだからその内に歩けなくなるよ」という感じで気づいてくれるようになりました。それで、とても過ごしやすくなりました。

仮設住宅にはいろんな不具合があり、二重サッシにしてみたり、断熱材を入れてみたり、カビが生えてくるので天井裏に換気扇を付けてみたり、すごいことばかりやっていたのですが、みんなに助けられてとても充実していました。



そうして4年半を過ごしました。そこでの生活にすっかり慣れてしまいましたが、いざ復興住宅にあたりました。それも石巻の復興事業の目玉になる団地でした。これもたまたまなのですが、障害者用も一般用も落ちたのですが、キャンセルがあるから入らないかと言われて行ったところでした。ちょっと想像がつかないかもしれませんが、2階だったのですが、それはエレベーターがあるからいいです。問題は家の前にベランダがあり、その前に通路があるのです。その通路の前をみんなが通るので、それがすごく気になります。普通、2階だったら調子の悪いときはパジャマのままでもうろうろしていても気にならないのですが。

通路側には玄関があります。普通、玄関はベランダの反対側ですが、私たちが入っている石巻の復興の目玉になる団地はベランダ側の通路に玄関があります。だから、必ずだれかが歩きます。それがすごく不思議で、建てた会社に聞いてみました。そしたら、ここはもともと神奈川県若き世代が入る団地だったらしいのですが、それがボツになったらしく、それを早く作りたい石巻がチョイスしたみたいです。

私はフラットな部屋でしたが、となりのおばあちゃんたちの部屋は、リビングダイニングが下にあり、階段があって2階に寝室があります。そういう部屋があったかと思えば、今度はダイニングキッチンが上にあり、おばあちゃんたちは上がり下りしたくないといけません。私ではとても無理ですが、そういう部屋がいっぱいあります。一部屋ずつ違うというのは、神奈川県の施工主の話だと、ここは一戸建てのコンセプトだということです。

しかし、メゾネットタイプ（住戸内が2階以上に分かれるもの（複層住戸））に入ったおばあちゃんたちは結局断りますよね。そのキャンセルが、私たちみたいにどこにも行くところのない人にまわってきているわけです。

私も、2階建てだったらキャンセルしたと思います。そういうことをぜんぜん考えないでやってみたりします。特別に石巻がそうだとは思いたくありませんが。

あと、同じ復興住宅でも、20年の借上げがあります。神戸のときに失敗して、2、3年前から騒いでいますよね。一人暮らしの80代のおばあちゃんたちが行くところがなくて。それを石巻で建てたのですよ。そこにいま、60代、70代の方が入っています。その方たちも20年後には90代になりますよね。どうするのだろうと何回もかけあったのですが、一市民の声としか聞いてもらえません。それどころか「あなたは病気を持っているといっても自分で歩けるし話もできるし、こうやって私たちのところに来られるじゃないですか。他の人のことなど気にしないで自分のことだけを考えなさい。いまは自分が大事」というのです。

私は自分がいいからそれで終わりというのはすごく嫌なのです。残されたおばあちゃんたちや障害で車いすの方とかもおられるので、こういう人たちのことも考えていきたいです。仮設住宅ですごく失敗したので、どうして復興住宅では失敗しないようにと考えないのか不思議です。

けれど、そういうことは現地にいる私たちはわかりますが、まわりの方はりっぱな仮設からりっぱな復興住宅に移ってというニュースしか見ていないだろうと思い、きょうはそういった話をさせていただきました。石巻はそうした現状で、ちぐはぐな感じです。

そこに入りたくても、生活できないからキャンセルしていることをわかってもらいたいと思います。おばあちゃんたちが少しでも暮らしやすいようにと思い、微力ですがみんなと活動していますが、なかなか石巻の行政の人たちには届かないみたいで悲しい毎日を送っています。

### 【講演3】 佐藤 正男氏

佐藤です。行政の人もたいへんだったと思いますが、阪神・淡路の経験がぜんぜん役に立っていないとつくづく感じました。今になってみれば、もう何を言っても仕方ありません。言えば、あなたらのひがみだととられます。



行政など、資料をいっぱい持っているところは早く安全な場所に逃げたといいます。そうした資料が何もこないとこは、放射線量の高い所、高い所へと逃げていきましたが、浪江はその典型的な例です。とりとめのない話になってしまいますが、震災から少し落ち着くぐらいまでの話をしたいと思います。

私の家は浪江町です。浪江町は、帰還困難区域、避難指示解除準備区域、居住制限区域にわかれています。私の家は、居住制限区域です。それは後になって線を引いたものです。震災のとき、私は群馬県の水上にいました。娘が2人目の子どもをお産するということで、向こうに着いてお茶を飲んだら地震がありテレビで放送しました。これはだめだと息子に電話をしたら、福島県の浜辺は全滅だという話になって、その日は泊まる予定でしたがとりあえず帰ろうということになりました。

群馬県を出ると、関越道は通行止めです。信号は点滅していたり、点灯すらしていません。17号線を下ると、群馬県に空っ風街道というのがあります。そこを通り渡良瀬街道を通過して日光を抜けて4号線に出てきました。信号が点灯していないので怖いので、スピードを落とすとしてぶつからないようにしていきました。須賀川や白河にきたら、ダムが壊れているのです。地盤が悪くて4号線が通行止めになりました。今度は東に行って三春に出ました。向うを夕方の明るいうちに出たのですが、双葉町に着いたのは明け方でした。

そうしたら、双葉町の人たちは「もうだめだ」と言って288号線を通り郡山の方に向かってどんどん逃げていきます。私が双葉町に入るところ、後ろから救援の大型バスが大熊町や双葉町にどんどん入っていきます。協定を結んでいる所には、情報が入るのですね。浪江町には何もきません。FAXで送ったとか送らないとか、いまになって堂々巡りです。

浪江町に着いたら、浪江の人たちは地震で倒れたタンスなど、家を片付けています。それで原発は危ないということで、親戚が114号線に津島地区というのがありますが、そこに3日ぐらいいました。いまにして思えば、一番線量の高かった所です。そして今度は原発が爆発しまして、これではだめだということでとりあえず中通りに逃げようということになり、他の人が逃げた後に浪江の人が逃げました。

郡山に行っても受け入れてくれるところがありません。郡山のスポーツセンターでスクリーニングというのですか、体の線量を計り、そこで線量をあびている人は裸になってシャワーを浴びるといった状況でした。

私らは県の農業センターに避難しろと言われ、そこに2週間ぐらいいました。本当は家族といたかったのですが、私は仕事を持っていました。浜通りに仮設住宅を作るということで応援にきてといわれ、新地・相馬の方に行きました。原ノ町のホテルから行くのですが、朝6号線を通ると、戦争みたいに一番最初に自衛隊のバイク隊が来て、その次に6輪の装甲車が来ます。機関銃を外しているだけです。次に大型のトラックやトレーラー、そして一番後ろに衛生班の赤十字の付いたジープが付いていきます。そういうのを見ながら仕事をして、週末は郡山に帰る生活をしていました。

そして今度は、浪江町の人には土湯とか猪苗代に避難しろと言われました。私たちは猪苗代のホテルにいたのですが、親父ががんを患ったあとで体調を崩して猪苗代の病院に入院しました。次に、相馬に大野台というのがありますが、その仮設住宅に入ろうということになりました。しかし、私は仕事をしている関係で仮設は無理だということになり、ツテをたどって借上げをみつけ、そこに入って家族とバラバラになりました。その頃は夫婦関係もおかしくなり、刃物を持ち出すとか眠れないとかね。すごい状況でした。

頭もおかしくなって薬を飲まないとか眠れないとか食べられないという感じでした。でも、仕事はしないといけないとか、総理大臣命令だということで仮設住宅を作っていました。新地の仮設が終わった後は白河をやって船引をやりました。その頃は2週間ぐらい、食べられなくて眠れず、目つきもへんになり6キロぐらい体重が減りました。

それでも何もやらないよりはいいだろうと、病院やホテルを復興させる仕事や老人施設名などをまわっていました。相馬市に飛天というホテルがあります。天皇陛下も泊まったほどのホテルですが、自衛隊や死人の回収をする人の長靴がダンボールの上に並べてあったのには驚きました。

それからずっと家族とは別れ別れで、一か月も連絡しないと、感覚が違ってくるので会えば喧嘩になります。そのころ私は犬を置いてきました。その犬のことが気になり、犬の話をすると、家族と犬とどちらが大事なのと喧嘩が始まります。酒に酔いながら帰ってくるとかね。このまま離婚してもいいかなと思いました。

そして1年が過ぎたころ、小鷹先生と会うことができました。昔から山歩きと魚釣りが好きだったので、先生や知り合いの方と山歩きなどをしました。昔の友だちは中通りに行ってしまい、私は浜通りでポツンと独りぼっちになり、仕事が生きがい、仕事が趣味といった生活をしていました。

いまになって引きこもりとか言っていますが、私は自分の震災後1、2年の経験から、こうなるだろうということはだいたいわかっていました。なぜ阪神淡路大震災の教訓が生かされなかったのだろうと思いました。

浪江町の役場は二本松にあるので、現実を見ないで遠くから理想論だけです。ある人が浪江で野菜を作り始めると、町や県とか農協が反対してきました。でも、その人がテレビに出

るようになると否定できなくなりました。有名になると、今後は町や県、農協が後ろ盾になるという感じです。

その後、少しずつ落ち着いてきましたが、今度は薬依存症になってしまいました。薬を飲まないで夜中に目が覚めるような気がして、薬を飲むとほっとして寝られるという感じで、いまは3種類を飲んでます。みんなに会うと何を飲んでいるかと、薬の自慢話になります。震災前には考えられなかったことです。

犬は、震災直後においていかれたということあるので、朝、私が出社に行くときは寂しい顔をします。今度、帰ってくると本当に喜びます。自分にとっては、家は新しくなりましたが、精神的にも落ち着いてきて、これでかまわないのかぁという気持ちです。かみさんも、だんだんわかってきたみたいです。かみさんは、仮設ではみんなでわいわいとやっていましたが、仮設を離れるとやる事がなくなりました。毎日、いろんな理由をつけて仮設に行きます。やっぱり、先ほど小鷹先生が言った、楽しみとかをこれからどのようにうまくやっていくかです。

仮設で仲良くなっても、復興住宅は抽選で新しいところに行くから、またばらばらになります。新しい家をつくっても、そこに知っている人がだれもないから、また仮設の知り合いなどに会いに行くしかありません。そういうところを、これから国や行政がどのように考えてくれるかです。もう、浪江には帰れないですからね。

私の健康年齢でいくと、人生はあと10年か15年です。そのなかで楽しく死んでいきたいという感じです。息子はまだ独身で通勤族ですが、息子には言った言葉が一つだけあります。お墓と仏壇だけは、どこに行っても守ってくれと頼みました。

仕事はいくらでもありますから、仕事をしているときは楽しいです。家に帰ったら犬と遊んで横になってテレビを観て、それが一番のいいかなぁという気がします。贅沢といえば贅沢かもしれませんが、ただ、故郷とかすべてを否定されてしまった町ですからね。以上です。